

研究主題

子ども一人一人が自他の生命の大切さを
実感できる道徳学習の在り方

—道徳の時間において、各教科等と関連付けて
「生命尊重」の自覚を深める指導を要として—
かなめ



始良市立蒲生小学校
教諭 池下 龍郎

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	1
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究計画	2
III	研究の実際	2
1	研究主題，副題に関する基本的な考え方	2
(1)	自他の生命の大切さを実感できている姿	2
(2)	道徳の時間において，各教科等と関連付けて「生命尊重」の自覚を深める指導	2
2	「生命尊重」の道徳的価値についての研究	3
(1)	「五つの生命観」	3
(2)	「五つの生命観」と子どもの発達段階	4
3	「生命尊重」に関する実態調査の分析と考察	6
(1)	実態調査の概要	6
(2)	実態調査の分析と考察	6
(3)	実態調査のまとめ	7
4	『「生命尊重」道徳学習』の構想	8
5	『「生命尊重」道徳学習』の指導計画作成	9
(1)	道徳の時間に関連付ける各教科等の内容及び教材の選択	9
(2)	道徳の時間において，各教科等と関連付ける場面の設定	11
(3)	よりよく生きようとする子どもの姿の具体化	11
(4)	『「生命尊重」道徳学習』の指導計画	12
6	道徳の時間と各教科等の知識や経験に関連付ける指導の工夫	13
(1)	各教科等において，「生命尊重」の気付きを生む指導の工夫	13
(2)	道徳の時間において，「生命尊重」の自覚を深める指導の工夫	14
(3)	よりよく生きようとする子どもの意欲や努力を支える指導の工夫	15
7	検証授業の実際と考察	16
(1)	5年生の発達段階における「五つの生命観」からの指導事項例	16
(2)	検証授業Ⅰの実際	16
(3)	検証授業Ⅰの考察	20
(4)	検証授業Ⅱの実際	21
(5)	検証授業Ⅱの考察	25
(6)	検証授業Ⅰ，Ⅱを通した子どもの変容の分析と考察	26
IV	研究のまとめ	28
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

I 研究主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会の変動は大きく、様々な調査によると、自分に自信がある子どもが少なかったり、学習や将来の生活に対して無気力であったり不安を感じていたりする子どもの増加が指摘されている。学校教育においては、子ども一人一人が自他の生命の大切さを実感し、共によりよく生きようとする力を育成することが喫緊の課題である。新学習指導要領では、「自他の生命を尊重すること」を全学年の重点指導内容として位置付け、同解説道徳編でも、「生命の大切さはどれだけ強調してもし過ぎることはない。すべての道徳性は、生命が大切にされてはじめて成り立つもの。」とし、生命の大切さについて様々な視点から考えを深めていくことを重視している。

本校では、「自ら学ぶ意欲と豊かな心を持ち、たくましく生きる力を備えた子どもを育てる」という教育目標の下、生活科でウサギと触れ合う活動を設定したり、理科でインゲン豆の成長を観察する活動を設定したりするなど、教育活動全体を通じて「生命尊重」にかかわる道徳教育を行ってきた。しかし、日常の生活においては、危険な遊びや友達の心を深く傷つける言動など、自他の生命の大切さを実感できていない子どもの姿が少なからず見られる。

この要因を道徳教育の側面から考えると次の三つが問題点として挙げられる。第1に、子どもが「生命尊重」について、多面的に考えを深めることができていなかったということ。第2に、子どもがそれぞれの学年の学習の中で「生命尊重」についての気付きを明確にもつことができていなかったということ。第3に、子どもが「生命尊重」を自分とのかかわりでとらえることができず、自分なりに発展させていくことへの思いや課題を十分にもつことができていなかったということである。

これらのことを解決するためには、まず、「生命尊重」について多面的に考えを深めていく指導の観点を明らかにしなければならない。次に、子どもの実態や発達^{かなめ}の段階に応じて「生命尊重」に気付かせるための指導計画を作成する必要がある。さらに、その要となる道徳の時間において、子ども一人一人が自分とのかかわりで「生命尊重」の自覚を深められるような指導の在り方を明らかにすることが重要である。

そこで本研究では、「生命尊重」の道徳的価値の分析と整理を行い、子どもの実態や発達^{かなめ}の段階に応じて道徳の時間と各教科等の密接な関連を図った指導計画を作成する。さらに、その要となる道徳の時間において、各教科等で気付かせた生命に関する知識や経験を補充、深化、統合して「生命尊重」の自覚を深める指導を行うこと（以下「『生命尊重』道徳学習」と呼ぶ。）で、自他の生命の大切さを実感できる子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

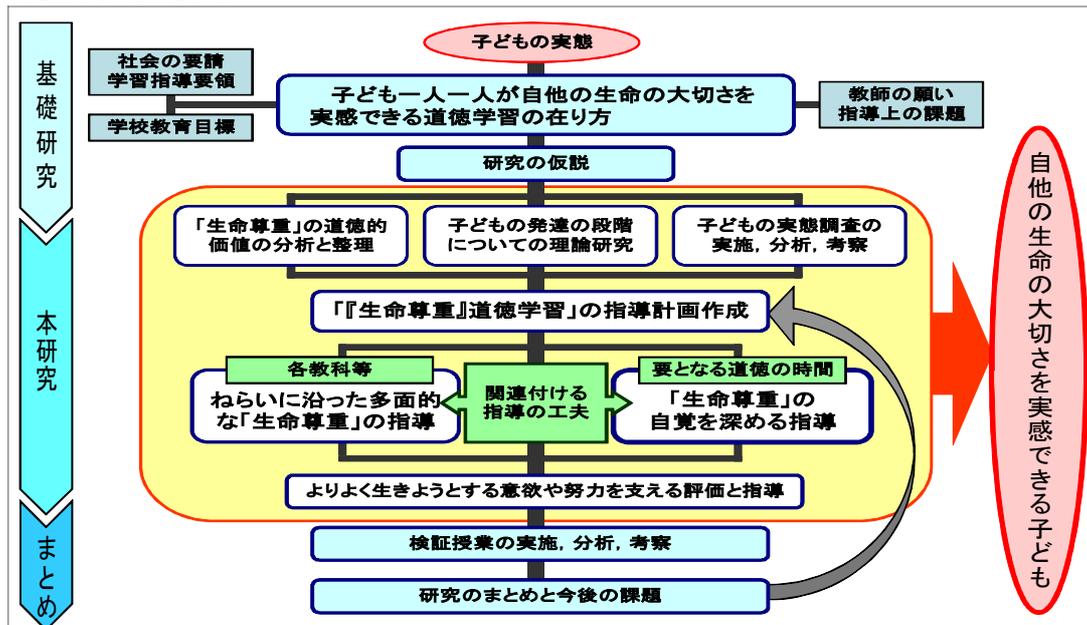
1 研究のねらい

- (1) 文献や先行研究を基に、「生命尊重」の道徳的価値の分析と整理を行い、子どもの実態や発達^{かなめ}の段階に応じた「『生命尊重』道徳学習」の指導計画を作成する。
- (2) 「『生命尊重』道徳学習」の要となる道徳の時間において、各教科等で気付かせた生命に関する知識や経験を補充、深化、統合し、「生命尊重」の自覚を深める指導の在り方を明らかにする。
- (3) 検証授業を実施し、結果の分析と考察を行って、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

「生命尊重」の道徳的価値の分析を基に、子どもの実態や発達^{かなめ}の段階に応じた関連的、発展的な指導計画を作成した上で、各教科等における知識や経験を道徳の時間に補充、深化、統合して「生命尊重」の自覚を深める指導を行えば、自他の生命の大切さを実感できる子どもが育つのではないかと仮定する。

3 研究計画（構想図）



III 研究の実際

1 研究主題，副題に関する基本的な考え方

(1) 自他の生命の大切さを実感できている姿

自他の生命の大切さの実感は内面的なものであり、確認することが難しい。嶋野道弘(2005)^{*1}は、「生命は『誇り』であり『感謝』である。『誇り』は自身を大切に作る心であり、むやみな行動を抑制し、自律心や自尊心に通じるものである。『感謝』は他者を思いやる心であり、自分の身勝手な意見や行動を制御し、相手の立場や気持ちを理解し、行動しようとする心に通じるものである。」と述べている。この考え方に立ち、本研究で目指す子どもの姿を次のようにとらえた。



図1 自他の生命の大切さを実感できている子どもの姿

自分自身への「誇り」と他者への「感謝」を自覚し、自他共にによりよく生きようとしている子ども(図1)。

(2) 道徳の時間において、各教科等と関連付けて「生命尊重」の自覚を深める指導

子どもは学校の教育活動全体を通じて、自他の生命の大切さに気付いていく。例えば、国語科では生命にかかわる文学的な文章の学習、理科では植物の観察など、各教科等の様々な学習を通して、直接的、間接的に生命への気付きを生むことができる。しかし、その学習の中で子どもが自分とのかかわりで「生命尊重」をとらえ、自分自身への「誇り」や他者への「感謝」を明確に自覚することは少ない。また、道徳の時間の指導だけでは、子ども一人一人が「生命尊重」の自覚を深めることは難しい。そこで、『生命尊重』道徳学習における道徳の時間では、各教科等で考える機会を得られなかった道徳的価値を補充し、生命に関する知識や経験を自分とのかかわりからとらえ直して一層考えを深化させ、道徳的価値の全体的なつながりを統合して、「生命尊重」の自覚を深めるといふ、道徳教育の要としての役割を明確に打ち出すようにした。

※1 嶋野道弘監修 『生命尊重の心をはぐくむ』 2005年 東洋館出版社

2 「生命尊重」の道徳的価値についての研究

(1) 「五つの生命観」

「生命尊重」は、生命の大切さに関する道徳教育の内容項目である。ここでは、生きているすべての生命の尊さに価値を置きながら、主として人間の生命の尊さについて考えを深めることになっている。学習指導要領解説道徳編は、「社会的なかかわりの中での生命や、自然の中での生命、さらには、生命の尊厳性など、多面的な視点から考えを深めていくこと」と示している。ここで重要なことは、教師が生命の多面性を的確に把握して指導に当たるということである。生命の多面性について、柴原弘志(2004)^{※2}や先進校^{※3}の考え方を基に、神秘性や偶然性といった十の観点を明らかにし、それを指導に生かせるように整理、統合して、新たに「五つの生命観」としてまとめた(表1)。

表1 「五つの生命観」を踏まえた指導と生命の大切さの実感

五つの生命観 (十の観点)	『生命尊重』道徳学習で 指導する内容	『生命尊重』道徳学習で ねらう生命の大切さの実感
始 ま り (神秘性, 偶然性)	生命の誕生や体のづくり, 成長などは驚くほどの不思議さや美しさをもっている。また, 奇跡的な巡り合わせで誕生し, 成長している。	【自分の生命の大切さの実感】 自分の誕生の奇跡を理解したり, 目標に向かい努力することや達成する喜びを感じたりすることで, 生きていることを喜び, 自分自身への「誇り」を自覚する。
つ な が り (連続性, 関係性, 精神性)	【時間的なつながり】 生命は38億年以上もの間, 途切れることなくつながり続け, 親から子へ受け継がれるものである。 【空間的なつながり】 生命は個としては成り立たず, 複数の生命が互いに関係し, 助け合い, 支え合うことで存在している。また, 生命は「食べる・食べられる」関係によって存在することができる。 【精神的なつながり】 生命は生き方を通して, 死んだ後も他者に影響を与えるなど, 精神的なつながりを生むものである。	【他者の生命の大切さの実感】 自分の生命が親から受け継がれてきたものであることを理解したり, 多くの人・ものと直接かかわる中で, 助け合い支え合って生きていることに気付いたりすることで, 他者への「感謝」を自覚する。
終 わ り (有限性, 不可逆性)	個としての生命には必ず死が訪れ, 決して生き返ることはない。	【自他の生命の大切さの実感】 自分への「誇り」と他者への
た た っ た 一 つ (平等性, 尊厳性)	生命はすべての生き物にたった一つだけ等しく与えられており, かけがえのない尊厳がある。	「感謝」は相互に響き合い, 一体となって, 自他共によりよく生きようとする心を膨らませていく。
喜 び (歓喜性)	生きていることはそれだけですばらしいことだ。生命は幸せを求め, 夢や希望をもつことができる。	

『生命尊重』道徳学習は、「五つの生命観」を基に、教師と子どもが同じ観点から同じ言葉を用いて生命について考えを深めることが重要である。そこで、「五つの生命観」の関係性を高学年の子どもにも説明できるように下のような構想図(図2)にまとめた。

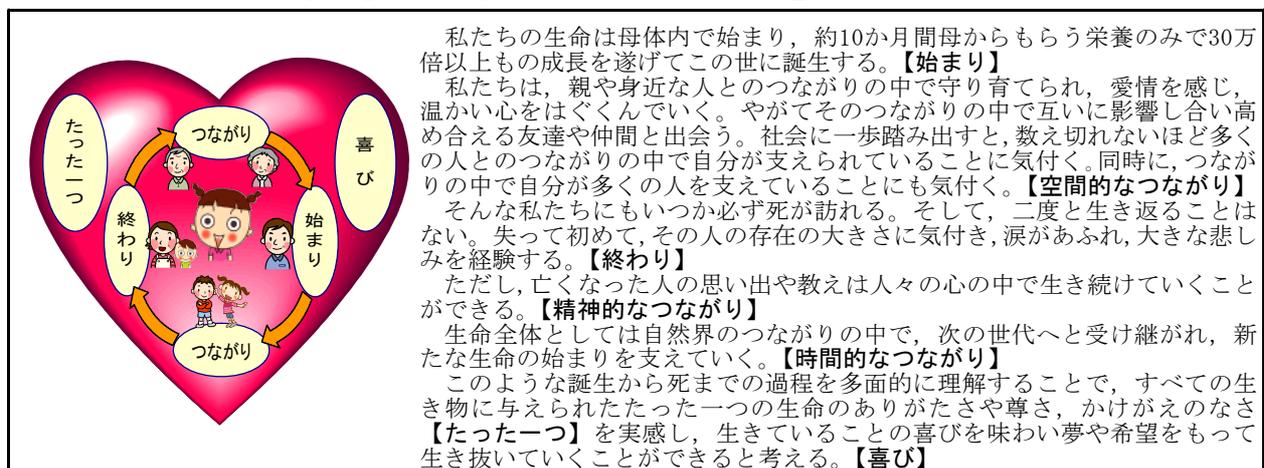


図2 「五つの生命観」の構想図

※2 柴原弘志 『中等教育資料』 2004・2005年 株式会社ぎょうせい

※3 志布志市立安楽小学校 『研究公開研究紀要』 2008年

(2) 「五つの生命観」と子どもの発達の段階

学習指導要領解説道徳編では、道徳性の育成と「生命尊重」のかかわりについて、次のように述べられている。

すべての生命のつながりを自覚し、すべての人間や生命あるものを尊重し、大切にしようとする心に根ざして、向上心や思いやり、公德心などの道徳的価値が形成されていく。

こうしてはぐくまれた道徳性は、個人の生き方のみならず、人間のあらゆる文化的活動や社会生活を根底で支えている。(小学校学習指導要領解説道徳編p. 17)

このことから、「生命尊重」はすべての道徳性の基盤となるものであり、全学年を通して、自他の生命の大切さを実感できるように指導する必要があることがわかる。そのためには、各学年の子どもの発達の段階に応じた指導が行われなければならない。

そこで、学習指導要領解説道徳編をもとに、子どもの主な発達の特性と生命認識の発達の特性を整理し、発達の段階に応じた「生命尊重」の指導の重点を明らかにした(表2)。

表2 子どもの発達の段階と「生命尊重」の指導の重点

学年	1・2年生	3・4年生	5・6年生
主な発達の特性	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 幼児期の自己中心性が強く自分勝手な行動をとることが多い。 ◆ 善悪の判断や具体的な行為は、教師や保護者の影響を受ける部分が多い。 ◆ 他人の立場を理解したり、自分と異なる考えを受け入れたりすることが難しい。 ◆ 動植物などにも心で語りかけられる。 ◆ 仲間関係では次第に自分たちで役割を分担して生活や遊びができるようになる。 ◆ みんなのために働くことを楽しく感じている子どもが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 自分の行為の善悪についての判断力が高まってくる。 ◆ 仲間集団ができ、集団の争いや、集団への付和雷同的な行動も見られる。 ◆ 性差を意識する頃である。 ◆ 自然や崇高なものへの不思議さやすばらしさに感動する心が一層はぐくまれる。 ◆ 社会的な活動能力が広がり、地域や自然等への関心も増す。 ◆ 集団とのかかわりにおいては、徐々に集団の規則や遊びの決まりの意義を理解する。 ◆ 集団目標の達成のために協同作業を行える。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 抽象的、論理的に思考する力が増し、自他の行為の動機をも十分に考慮できるようになる。 ◆ 自律的な態度が発達し、自分の行為を自分の判断で決定できるようになる。 ◆ 高い理想を追い求める時期で、ある人物の生き方に憧れたり、自分の夢や希望が膨らんだりする。 ◆ 相手の身になって人の心を思いやる共感能力が発達する。 ◆ 異性に対しては、対立的ではなく、積極的な興味を抱くようになる。 ◆ 環境保護や人間の力を超えたものへの畏敬の念も培われてくる。 ◆ 所属する集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まる。
生命認識の発達の特性	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 生命の大切さを知的に理解するというより、生活経験の中で生きていることを感じ取ることが中心になる。 ◆ 思考による認識より身体を通じた認識が圧倒的に強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 現実をもって死を理解できる。 ◆ 自分の生命を客観的にとらえることができるようになってくる。 ◆ 思考による認識より身体を通じた認識が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 生命の誕生から死に至るまでの過程を理解できる。 ◆ 様々な人との支え合いの中で一人一人の生命がはぐくまれることが分かる。 ◆ 生命が祖先から自分そして子孫へと受け継がれていくことをより深く理解できるようになる。
指導の重点	<p>生きている証を実感し、そのことに喜びを見いだせるように指導する。</p>	<p>生きていることのありがたさや生命の尊さを感じ得るように指導する。</p>	<p>生命のかけがえのなさを自覚し、自他共に生きていることのすばらしさに気付けるように指導する。</p>

さらに、「生命尊重」の指導の重点を基に、「五つの生命観」を踏まえた具体的な指導事項を明確にした（表3）。

ここで重要なことは、『生命尊重』道徳学習の中で、子どもがどのような思いに至ったときに、自他の生命の大切さを実感できたとするのかを、教師がはっきりとイメージしておくことである。自他の生命の大切さの実感は、言語など具体的な子どもの姿として表出されなければ確認することはできない。そこで、子どもの発言や記述に表出すると予想される自分自身への「誇り」と他者への「感謝」を自覚できた子どもの言葉を例示し、「五つの生命観」を踏まえて多面的に指導していけるようにした。

表3 子どもの発達の段階と「五つの生命観」を踏まえた指導事項

学年	1・2年生	3・4年生	5・6年生	
「五つの生命観」からの指導事項の例	始まり	<ul style="list-style-type: none"> 誕生日を祝うことで、自分や友達の生命の始まりを喜べるようにする。 精子や卵子、受精の働きを知り、自分の生命誕生のすばらしさに気付かせる。 自分の体と心の変化に気付き、成長のすばらしさや不思議さを理解させる。 身近な生命の誕生を共に喜べるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 誕生日に自他の生命の始まりを祝い、将来の自分の姿を思い描けるようにする。 生命が多くの偶然と奇跡によって誕生することに気付かせ、誕生の喜びについて考えを深める。 生き物の体のつくりと働きの関係の美しさに気付かせる。 	
	つながり	<ul style="list-style-type: none"> 命が親から受け継がれて誕生することに気付かせる。 友達と一緒に勉強したり、遊んだりする中で人とつながる楽しさを感じ取らせる。 自分のことで友達や親など身近な人が喜んだり悲しんだりすることに気付かせる。 自然の中で遊び、生命あるものがすべて周りのものの愛情や温かいつながりによって生かされていることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の生命が祖先から親、自分へと受け継がれたものであることを理解させる。 私たちが多くの人や食べ物(生き物の命)に支えられて生きていることを理解させる。 世界の人々とのつながりから、人々の支え合いや助け合いによって生かされていることに気付かせ、自分の役割や責任を果たすことの大切さなど生き方について考えを深める。 	
	終わり	<ul style="list-style-type: none"> 大切にしてきた生き物の死に出会ったときの悲しい気持ちや、自分たちではどうにもできない自然への畏れに気付かせ、生命あるものをいとおしむ気持ちを培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な家族や親戚、育てていた動植物の死などから、命には必ず終わりがあることを理解させる。 死を取り上げて学習することで、生命が二度と戻らないことに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 誕生から死までの過程を理解させ、生命のかけがえのなさに気付かせ、生きていることに感謝し、力強く生き抜くことの大切さについて考えを深める。
	たった一つ	<ul style="list-style-type: none"> 植物を育てたり、小動物と触れ合ったりする中で、生き物も自分と同じ生命をもっていることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な家族や親戚、育てていた動植物の死などから、失われた生命の尊さに気付かせる。 病気やけがの様子から自分の生命の尊さに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 病気やけがをしたときの「生きたい」という気持ちに気付かせ、生きていることのすばらしさについて考えを深める。
	喜び	<ul style="list-style-type: none"> 運動の中で心臓の鼓動を感じ取らせたり、給食を食べておいしいと感じ取らせたりして生きている喜びを認識させる。 誕生日を祝い、生きている喜びを感じ取らせる。 自分が大切に思っているものへの愛着や、自分が世話することで生き物が生き生きと成長することの喜びに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のめあてに向かって積極的に活動し、成長した自分を振り返らせるようにする。 友達と同じ目標に向かって協力することや目標達成することの喜びを感じ取る機会を多く設定する。 誕生日を祝うことで、自分や友達の生命の始まりを喜べるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標を達成した喜びを感じさせ、生きていく上で夢や希望の大切さについて考えを深める。 学校や学級において自分の役割や責任を果たすなど、人の役に立った喜びを感じ取らせる。 誕生日に自他の生命の始まりを祝い、将来の夢や希望を思い描けるようにする。

自覚できた子どもの言葉例

「誇り」と「感謝」を

- わたしは～だから、生きているんだ。
- (友達と)遊んだり、勉強したりできるのがうれしい、友達っていいな、仲良くするよ。
- 家族と一緒にいてくれるといい気持ち、大切にしたいな。
- 小さな生き物も自分と同じように生きているから、虫や動物が死んだり、花が枯れたりしないように、大切にお世話する。
- 小さな子にもやさしくするよ。
- これからも元気よく楽しく生活するぞ。

- 赤ちゃんが生まれるのはすごうれし～かなんなんだな。
- わたしも生まれるときに喜んでもらってうれしいな。
- 家族のお陰だありがとう。
- 社会のいろいろな人のお陰でみんな生活できている、ありがたいな。
- 人はいつか死ぬ、二度と戻らない命を大切にしたい。
- すべての生き物には、命があるから、大切にしたい。
- 自分のめあてに向かって努力するぞ。

- わたしは家族に望まれて生まれてきたから、受け継がれた命を大切にしたい。
- 友達も大切な命をもって生きている。友達も大切にしよう。
- 顔も知らない世界中の人と支え合って生きている、自分も役に立ちたいな。
- 命はいつかなくなるから、それまで精一杯生きたい。
- わたしたちは自然から生きる力をもらっているんだ。自然を大切にしたい。
- 命を輝かせるために夢や希望をもって生きていきたい。

3 「生命尊重」に関する実態調査の分析と考察

(1) 実態調査の概要

調査目的	子どもや教師、保護者の生命に関する認識、誕生や死の場面に出会った経験等の実態を把握し、『生命尊重』道徳学習の指導計画や指導の工夫を構想する。			
実施期間	平成22年6月8日（火）～6月18日（金）			
調査対象	始良市立蒲生小学校児童	1年生（50人）	2年生（50人）	3年生（60人）
		4年生（56人）	5年生（54人）	6年生（63人）
	始良市立蒲生小学校教師	16人		
	始良市立蒲生小学校保護者	229戸		
調査方法	質問紙法による			

(2) 実態調査の分析と考察

ア 子どもの実態について

図3から、身近な人の誕生の場面に出会った経験のない子どもが64%いることや、身近な人の死の場面に出会った経験がない子どもが60%いることから人の誕生や死の場面については未経験の子どもが多いことが分かる。

人の誕生や死の場面に出会った経験のある子どもの心情的な側面をしてみる。図4から、身近な人の誕生の場面に出会った経験のある子どもの意識は、単に「かわいい。」というとらえ方だけではなく、「優しく接したい。」といった、自分とのかかわりで生命の誕生をとらえた気持ちが学年が上がるにつれて多くなっていることが分かる。また、図5から、身近な人の死の場面に出会った経験のある子どもの意識は、単に「かわいそう。」というとらえ方だけではなく、「悲しくて涙が出た。」というような自分とのかかわりで人の死をとらえた気持ちが多いことが分かる。

人の誕生や死の場面の経験など、「五つの生命観」の「始まり」や「終わり」の観点については、体験的に理解させることが難しいため、保護者や教師の体験を聞かせるなどの丁寧な指導が必要である。「喜び」の観点については、誕生の場面に出会った子どもの喜びを全体に紹介するなど、個の経験を全体に広げる指導が考えられる。「つながり」の観点については、自分とのかかわりで生命の誕生や死についての考えを深める指導が課題として見えてくる。

図6から、「死んだ人が生き返ると思いますか」という問いに対して、児童全体の22%が生き返ると思っていることが分かる。1年生から4年生までは生き返ると思う子どもの割合が徐々に多くなっており、4年生では44%もの子どもが生き返ると思っている。生き返る理由としては、「死んでも生まれ変わる」が最も多く、「終わり」や「たった一つ」の観点から、限りある生命を大切にするという指導が課題として挙げられる。

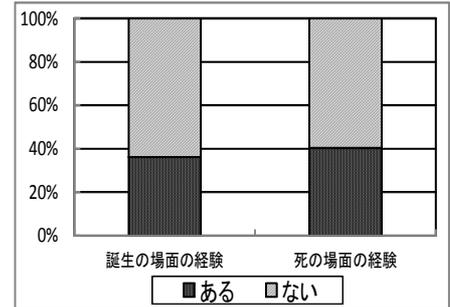


図3 人の誕生や死の場面に出会った経験

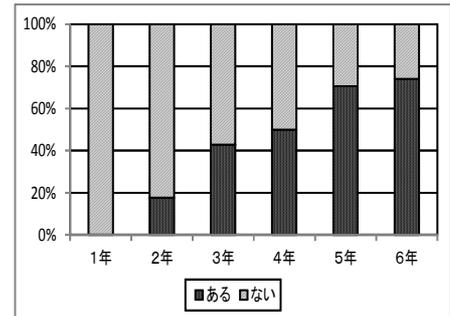


図4 自分とのかかわりで人の誕生をとらえた気持ち

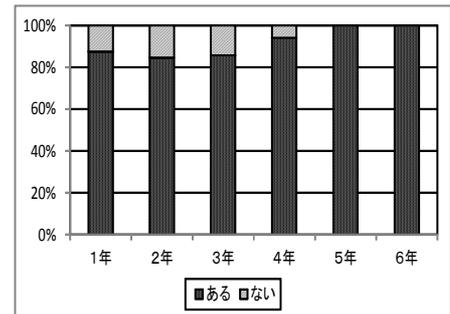


図5 自分とのかかわりで人の死をとらえた気持ち

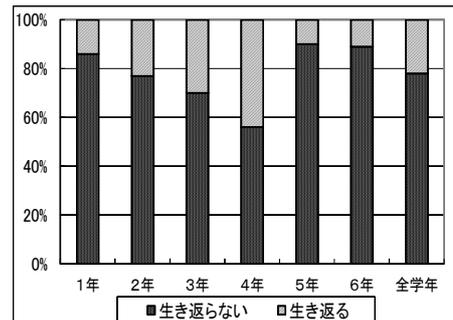


図6 生命の不可逆性に関する意識

図7においては、「〇〇のことを大切に思いますか」という問いに対して、自分が知らない他者の生命について大切に思っていない子どもの割合が18%、自分の生命について大切に思っていない子どもの割合は2%であった。このことから、「つながり」や「たった一つ」の観点から、自分は知らない人たちにも支えられて生きているという指導や自分を含めたすべての生命がかけがえのないものであるという指導が課題になると考える。

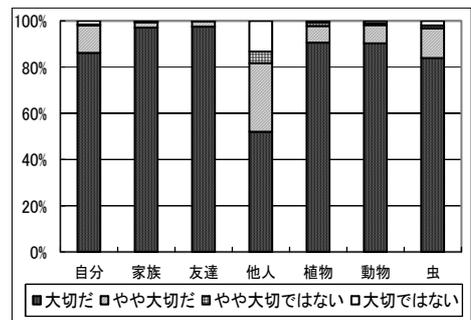


図7 大切に思う存在に関する意識

図8においては、子どもが「生きててよかった」と感じる時として、家族や友達と一緒に過ごすということや自分の好きなことに集中して目標が達成できるということが多く挙げられていることが分かる。そして、家族に褒められたり、喜ばれたりすることも、「生きててよかった」と感じさせる大きな力になることが分かる。「つながり」の観点から多くの人とのかかわりの中で、生きる「喜び」を味わわせる指導が大切である。

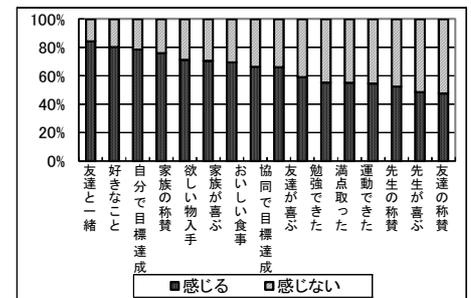


図8 子どもが「生きててよかった」と感じる時

イ 教師の意識について

図9では、「生命尊重」について本校教師の33%が、各教科等における指導にやや不満足と回答しており、27%が発達の段階に応じた指導に、不満足・やや不満足と回答している。また、「五つの生命観」の指導満足度を見ると、どの観点においても不満足・やや不満足の見られる。このようなことから『生命尊重』道徳学習の指導計画には、子どもの発達の段階に応じた各教科等における生命尊重の指導のポイントを明確に示すことや、「五つの生命観」を踏まえて多面的な「生命尊重」の指導を設定する必要があることが分かる。

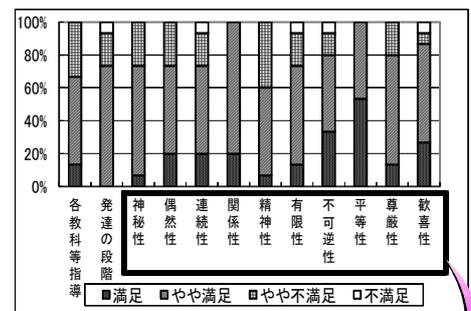


図9 教師の「生命尊重」指導満足度

神秘性, 偶然性 → 「始まり」の観点
 連続性, 関係性, 精神性 → 「つながり」の観点
 有限性, 不可逆性 → 「終わり」の観点
 平等性, 尊厳性 → 「たった一つ」の観点
 歓喜性 → 「喜び」の観点

ウ 保護者の意識について

図10では、本校保護者の80%以上が「五つの生命観」のすべての観点で、子どもに体験を語ったり、体験的に理解させたりすることについて、満足・やや満足と回答している。このような保護者の高い意識を「生命尊重」の指導に生かすために、学校と家庭の情報交換を密にしたり、保護者と協力して子ども一人一人が「生命尊重」の自覚を深めるような指導の工夫を行ったりすることが必要である。

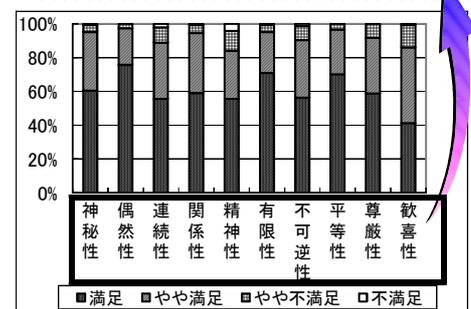


図10 保護者の「生命尊重」指導満足度

(3) 実態調査のまとめ

子ども・教師・保護者の実態調査から、「五つの生命観」のすべての観点から「生命尊重」の指導をすることが重要だと分かった。生命に関する子どもの生活経験や意識の実態は一人一人違う。それぞれの子どもが自他共によりよく生きることのすばらしさに気付いたとき、自他の生命の大切さを実感することができる。そのために、「五つの生命観」に基づいた『生命尊重』道徳学習の中で、生命の多面性を自分とのかかわりでとらえさせ、自分自身への「誇り」や他者への「感謝」の自覚を深められるようにしなければならない。

4 「『生命尊重』 道德学習」の構想

「『生命尊重』 道德学習」は、子ども一人一人が自他の生命の大切さを実感できるようにするために、本研究で新しく構想したものであり、次のように定義した。

「生命尊重」の道德的価値分析を詳細に行い、子どもの実態や発達段階に応じた関連的、発展的な指導計画を作成した上で、道德の時間において、各教科等で気付かせた生命に関する知識や経験を補充、深化、統合し、「生命尊重」の自覚を深める指導を行う教育活動

「『生命尊重』 道德学習」の要となる道德の時間の授業は、ねらいに沿った資料を通して価値を理解し、自分の生活を振り返って見つめさせ、「生命尊重」の自覚を深めるようにしていく。子どもの生活経験には個人差があり、「生命尊重」についての知識や経験もばらばらである。例えば、生活の中で生命誕生の場面や死の場面に出会った経験の有無によって、生命の「始まり」や「終わり」についての認識は大きく変わる。また、ペットを飼った経験の有無によって生き物への愛着や成長に関する理解の度合いは違ったものになる。つまり、個々の子どもの生活経験のみを取り上げて道德の時間の授業を行った場合、「生命尊重」の自覚の深まり具合には大きな差ができてしまうといえる。

そこで「『生命尊重』 道德学習」では、学級の子ども全員が各教科等において、直接的、間接的に生命に触れる学習を通して、生命に関する多面的な知識を獲得し、経験を積めるようにした。要となる道德の時間においては、各教科等で得た知識や経験を関連付ける場面を設け、各教科等における生命への気付きを補充、深化、統合する（図11）。そして「なるほど、やっぱり命は大切だ。」という「生命尊重」の自覚を深め、自他共によりよく生きようとする道德的実践力を育てていけるようにする。

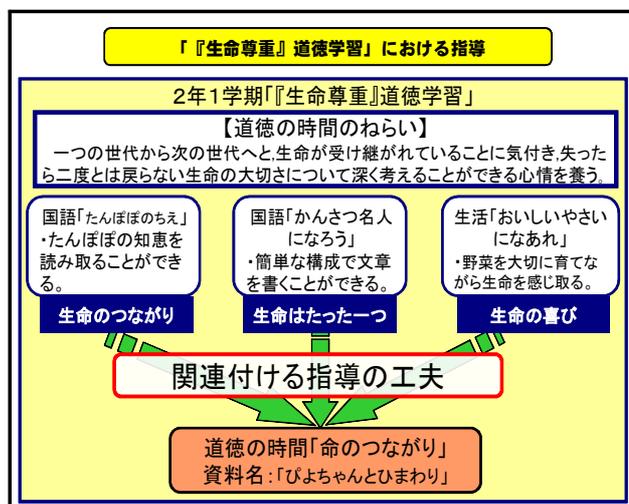


図11 「『生命尊重』 道德学習」の構想例

この「『生命尊重』 道德学習」を構想するに当たって、研究の視点を二つ設定し、それぞれ三つの留意点を挙げた（図12）。

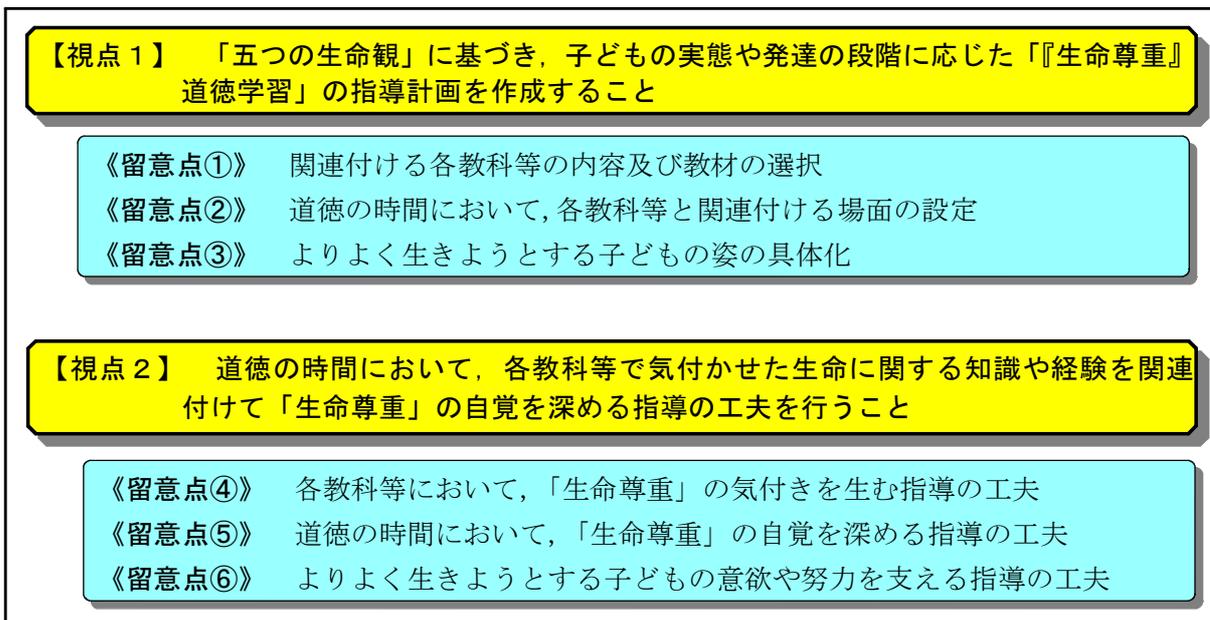


図12 「『生命尊重』 道德学習」構想の視点

5 『生命尊重』 道徳学習』の指導計画作成【視点1】

(1) 道徳の時間に関連付ける各教科等の内容及び教材の選択《留意点①》

ア 各教科等の目標や特質、内容と「生命尊重」のかかわり

『生命尊重』道徳学習』では、道徳の時間に関連付ける各教科等の学習の中でも「五つの生命観」を踏まえた指導を行い、子どもが生命に関する多面的な知識を獲得したり、経験を積んだりして「生命尊重」の気付きを生んでおく必要がある。

ここで留意しなければならないことは、各教科等にはそれぞれ固有の目標や内容があり、それぞれの教育活動の特質に応じて生命の大切さに気付かせる指導をするということである。

そこで、各教科等の目標や特質、内容と「生命尊重」がどのようにかかわっているのかを明らかにした(図13)。

各教科等	目標や特質、内容と道徳教育とのかかわり	特に、生命尊重にかかわるもの	
国語科	目標 国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。	目標を確認する	
	各教科等の特質や内容	道徳教育とのかかわり	
	◆ 国語による表現力と理解力とを育成し、人間関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う力を高めること ◆ 論理的な思考力や想像力及び言語感覚を養うこと ◆ 伝統的な言語文化に触れたり、国語の特質を理解したりしながら、国語に対する関心を深めたり、国語を尊重する態度を育てること ◆ 第2章第1節国語 第3(2)教材選定の観点 (道徳教育関連を抽出) ウ 公正かつ適切に判断する能力や態度を育てるのに役立つこと オ 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと カ 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと キ 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと ク 我が国の伝統と文化に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと ケ 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家、社会の発展を願う態度を育てるのに役立つこと コ 世界の風土や文化などを理解し、国際協調の精神を養うのに役立つこと	◆ 道徳教育を進めていく上でも道徳的価値の目覚めを深める上でも、基盤となるもの ◆ 道徳的心情や道徳的判断力を養う基本となるもの ◆ 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛することなどににつながるもの (4-(5)郷土愛、高学年(7)郷土愛、愛国心) ◆ 道徳教育の内容項目と重なる部分が多く、道徳的心情や道徳的判断力の育成にもつながるもの ウ 高学年4-(2)公正・公平、正義 オ 1-(4)誠実・明朗 カ 3-(1)生命尊重、2-(1)思いやり・親切 キ 3-(2)自然愛、(3)敬虔 ク 4-(5)郷土愛、中学年4-(6)愛国心、高学年4-(7)愛国心 ケ 4-(5)郷土愛、中学年4-(6)愛国心、高学年4-(7)愛国心 コ 4-(8)国際理解・親善	各教科等の特質や内容と道徳教育とのかかわりを明らかにする 特に、「生命尊重」とかかわるものは分かりやすく網掛け文字にして示す

図13 各教科等の目標や特質、内容と「生命尊重」とのかかわり(国語科を例に)

さらに、本校で使用している各教科等の教科書教材に含まれている「生命尊重」にかかわるものを抽出し、「五つの生命観」に基づいて分析した(表4)。この分析を基に、各教科等においてもそれぞれの特質に応じて、「生命尊重」を意識して指導できるようにした。

表4 教科書教材と「五つの生命観」とのかかわり(国語科を例に)

教科	1年	2年	3年	4年	5年	6年
とのかかわり	国語科では、教材の中に「生命尊重」の視点が入っているものが多く、6年間を通して「五つの生命観」から多面的に生命の大切さに気付かせることができる。1・2年では、動物や植物など客観的に目にすることができる生命について多く取り上げており、特に「かわいいな、大切にしたいな」といった生命への愛着を湧かせる指導ができる。3・4年では身近な家族の生命について別れや死を含んだ教材から生命の尊さを感じ取れるように指導できる。5・6年では、人と人とのつながりや人と自然界とのつながりから、その中での人々の生き方を通して、生命のかけがえのないさや自分の生き方についても考えさせていくことができる。					
「生命尊重」とかかわる教材	・いろいろなくちばし 「たった一つ」 ・大きなかぶ 「つながり」 ・ずうっと、ずっと、大 すきだよ「終わり」 ・どうぶつのお赤ちゃん 「始まり」 ・いいこといっぱい、一年生 「喜び」 ・たまぎの糸車 「つながり」	・たんぼぼの ちえ 「つながり」 ・かんざつ名人にな ろう「たった一つ」 ・スイミー 「つながり」 ・サンゴの海の生きも のたち「つながり」 ・楽しかったよ、二年生 「喜び」 ・スーホの白い馬 「終わり」「たった一つ」	・ありの行列 「たった一つ」 ・ちいちゃんのか げおくり 「終わり」 「つながり」 ・モチモチの木 「つながり」	・「かむ」こと の力 「喜び」 ・一つの花 「終わり」 「つながり」 ・ごんぎつね 「終わり」 「たった一つ」	・新しい友達 「つながり」 ・サクラソウとトラ マルハナバチ 「つながり」「たった一つ」 ・千年の釘にいとむ 「つながり」 ・わらぐつの中の神様 「つながり」 ・大造じいさんとガン 「たった一つ」	・カレーライス「つながり」 ・生き物はつながりの 中に 「つながり」「終わり」 ・平和のとりでを築く 「終わり」「たった一つ」 ・今、わたしは、ほくは 「喜び」 ・海の命「つながり」 「終わり」「たった一つ」 ・生きる 「たった一つ」
使用教科書	国語科：光村図書，社会科：東京書籍，算数科：学校図書，理科：東京書籍，生活科：教育出版，音楽科：教育芸術社 図画工作科：日本文教出版，家庭科：開隆堂，体育科保健領域：東京書籍					

(2) 道徳の時間において、各教科等と関連付ける場面の設定《留意点②》

『生命尊重』道徳学習の要となる道徳の時間の学習指導過程に、各教科等の学習における「生命尊重」の知識や経験を関連付ける場面を設定し、各教科等における「生命尊重」への気付きを補充、深化、統合して、「生命尊重」の自覚を深められるようにした（表5）。

表5 『生命尊重』道徳学習の要となる道徳の時間の学習指導過程

過程	役割	各教科等と関連付けて「生命尊重」の自覚を深める指導
導入	価値への方向付け	<ul style="list-style-type: none"> 学級全員で課題意識を共有できるように、各教科等における「生命尊重」の知識や経験を想起させる。 「生命尊重」に対する課題意識と本時で取り上げる資料や学習内容との関係を自分なりに興味・関心をもってとらえられるようにする。
展開前半	価値の理解	<ul style="list-style-type: none"> 資料を基に自分の「生命尊重」に対する課題意識や興味・関心を追究していく形で自分への問いかけを深める指導方法の工夫をする。 (資料に深く入り込むことによって、多様な立場から考える、状況を更に明確にして考える、状況を違えて考える、その背後にあるものを考える、各教科等での知識や経験を生かして考えるなどの指導方法がとれる) 常に、相手（主人公や主人公とかかわりのあるもの）の内面にあるよりよく生きようとする心に気付かせていく。
展開後半	価値の自覚	<ul style="list-style-type: none"> 資料を通して高めた「生命尊重」の価値理解を基に、自分自身のこれまでの生き方を客観的に見つめられるようにする。 自分が各教科等の学習の中で生き生きと活動している写真を見たり、生命を大切にしようとする思いが綴られた友達の作文を読んだりして、自分を肯定的に理解し、自他共によりよく生きようとする思いをもてるようにする。
終末	課題意識の高揚	<ul style="list-style-type: none"> 導入の課題意識を一段深めた形で把握でき、よりよく生きようとする希望や勇気がおのずとこみ上げてくるようにする。

(3) よりよく生きようとする子どもの姿の具体化《留意点③》

「生命尊重」はすべての道徳性の基盤となるものであり、自他共によりよく生きようとする子どもの思いは、生き方に発展するものとして学校生活や家庭・地域社会における個々の生活に全面展開されていく。その際、教師が子どもの道徳的実践を見取って適切に称賛し、個の指導や全体の指導に生かすことが重要である。教師の適切な称賛により子どもは「自分がしたことは命を大切にすることなんだな」とか「みんなの協力のおかげで目標が達成できたんだ」という自分自身への「誇り」や他者への「感謝」を自覚し、自他共によりよく生きようとする思いをより一層膨らませていく。

子どもの自他共によりよく生きようとする思いは内面的なものであり、確認することが難しい。そこで、子どもの具体的な道徳的実践を教育活動全体で見取り、適切に称賛するようにした。

教師が見取る場面としては、各教科等の授業時間、学校行事における体験活動の時間、休み時間や給食時間などの学校の日常的な生活場面、保護者との連携を密にして見取る家庭・地域生活の場面の四つを設定した（次ページ図15）。

称賛する道徳的実践例として想定するのは、けが人や病人に親切にしたり動物の世話をしたりするような直接生命にかかわる道徳的実践だけではない。目標達成に向けて努力していたり家族の手伝いをしたりするなど、「五つの生命観」と結びつけて自他共によりよく生きようとする思いが発揮される道徳的実践を幅広く挙げておくことが大切である。

学校の教育活動のあらゆる場面において、様々な道徳的実践を見取ることで、すべての子どもを適切に称賛することができる。それによって、子ども一人一人が自他の生命の大切さの実感を一層深めることができると考える。

(4) 『生命尊重』道徳学習の指導計画

『生命尊重』道徳学習では、^{かなめ}要となる道徳の時間の授業を1年間に低学年で3回ずつ、中学年と高学年ではそれぞれ2回ずつ行うように計画した。それぞれの『生命尊重』道徳学習の指導計画は、各教科等において「生命尊重」の気付きを生む指導と、それを補充、深化、統合して、「生命尊重」の自覚を深める道徳の時間の指導、生き方への発展として自他共によりよく生きようとする子どもの姿例を整理した様式で表した(図15)。



図15 「『生命尊重』道徳学習」の指導計画例(2年①)